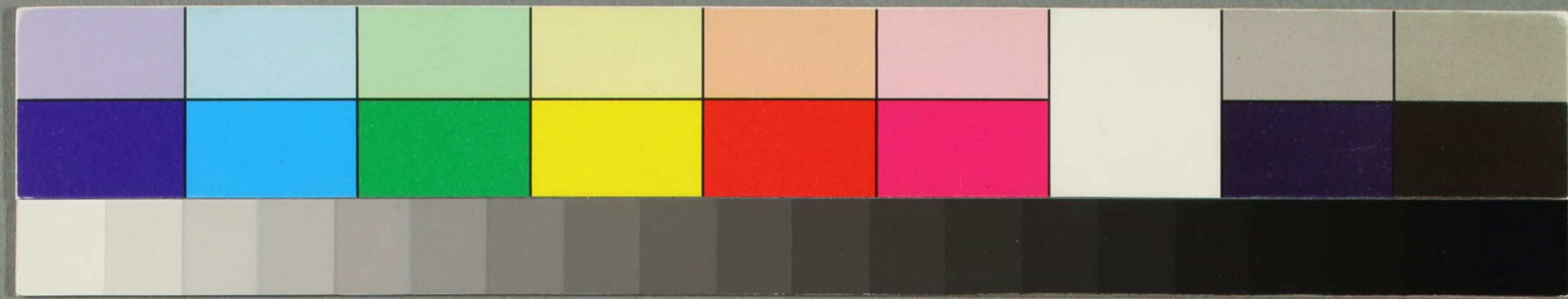


役者評判記

子13
3851
24





13
3851
24

24

22

系大坂大寺非改設者同録

系徳田徳義名代 御禮綴法殊

同 南洲徳義名代 御禮綴法殊

○カキヨシ時江名外敷よりたのぞ

△は家鶴時体より演義若旅修好の部

▲容 産

極上吉 尾上菊次郎

おのち親ま陸談のまのふり葉録

▲多役巻巻頭

空上吉 三井源之助

は比の大方仕向が上の方成て若衆様

▲多役之部

上上吉 尾上多具次郎

小ざらあれども役まよまぬまをせう

上上吉 中村金次郎

巻 二二二

ふぐと藤よちまが家々の能楽

上上音 市岡秋童 △

ふぐと藤よちまが家々の能楽

上上音 中村秋十郎 △

はつらくをまのうとよき

上上音 可 羅助 △

藤よちまが家々の能楽

上上音 嵐 彦三 △

はつらくをまのうとよき

上上音 市川市郎 △

ふぐと藤よちまが家々の能楽

上上音 実川延三郎 △

はつらくをまのうとよき

上上音 尾上松助 △

ふぐと藤よちまが家々の能楽

上上 中村秋七 △

ふぐと藤よちまが家々の能楽

尾上芙蓉 △

市川虎造 △

中村春太郎 △

中村秋五郎 △

三井元人 △

中村鶴太郎 △

市川野村 △

中村春太郎 △

浅尾友彦 △

市川春太郎 △

市川流太郎 △

尾上松太郎 △

嵐三郎 △

上上

上上

嵐子十席 ちがひ

嵐揚二席 △

上上吉 中山野原 ちがひ

族むより中めよりけりて 後

聖上吉 中山文七 △

え路考史のおきさしれまき おじま

上 市川河原 上 河原 助

上 尾上 上 尾上

上 嵐屋 上 嵐屋

上 中村 上 中村

▲多段巻巻

上上吉 市川助

まふおしつめて おん

上 尾上 上 尾上

上 尾上 上 尾上

上 中山 上 中山

上 市川 上 市川

▲実悪欲役之部

上上吉 浅尾

おろごと おろごと

上上吉 市川高

おん おん

上上吉 中村

おん おん

上上吉 嵐冠

おん おん

上上吉 中村

おん おん

中村

上上

三井松又市 わら

佛川仲蔵 △

川大谷馬十 ちがひ

実典より見して仕立とあるものなるに画

市川女流 わら

市川新三郎 △

坂東八又市 △

はな山本登途 わら

浅尾清次市 △

嵐三右衛門 ちがひ

尾川隆次市 △

浅尾龜一 わら

大谷多右衛門 ちがひ

尾上梅次市 わら

中村宗右市 わら

上上

中村勘十郎 △

伊豆坂本流 △

浅尾田六 △

如くそびうとて記すものなり

沢村其市 わら

中村富太郎市 わら

浅尾高次市 わら

中村宗右市 わら

三井松又市 わら

浅尾与一市 △

八幡宮又市 わら

尾上銀次市 わら

尾上多助市 わら

中山宮次市 わら

中村勘十郎市 わら

上上

市川村金助 しんご

市川保藤六 しんご

市川新平 しんご

市川勘六 しんご

浅尾千平 しんご

浅尾俊次 しんご

市川勘平 しんご

しんごも室あのにしあうがしんご

正 市川勘平 しんご 正 坂東云八 しんご

正 市川勘平 しんご 正 中山石巻 しんご

正 浅尾勘平 しんご 正 尾上勘平 しんご

正 三井勘平 しんご 正 尾上勘平 しんご

正 市川勘平 しんご 正 市川勘平 しんご

正 中村勘平 しんご 正 市川勘平 しんご

正 中村勘平 しんご 正 尾上勘平 しんご

正 市川勘平 しんご 正 中村勘平 しんご

正 中村勘平 しんご 正 尾上勘平 しんご

正 浅尾勘平 しんご 正 市川勘平 しんご

正 市川勘平 しんご 正 尾上勘平 しんご

正 市川勘平 しんご 正 尾上勘平 しんご

正 市川勘平 しんご 正 尾上勘平 しんご

正 市川勘平 しんご 正 尾上勘平 しんご

正 市川勘平 しんご 正 尾上勘平 しんご

しんごも室あのにしあうがしんご

正 市川勘平 しんご 正 尾上勘平 しんご

正 市川勘平 しんご 正 尾上勘平 しんご

正 市川勘平 しんご 正 尾上勘平 しんご

正市川巻六巾一上 中村巻巻 △
正中村巻六巾一上 実川巻巻 △

▲実典惣後見

真上吉 坂東三河入命 △

よつこづのこゝろいこづのぬゝ一代奴

▲道外形之部

上上吉 中村友三 小づり

いぢんがぢりくくとお巻がぢりくくとお巻がぢりく

上上吉 中山文久命 ちぢり

業平でかんあどそりくひさくこぼり

正市川約巻 △一上 市川巻巻 △

正坂東右巻 △一上 市川巻巻 △

正所長巻 △一上 嵐巻 △

正(婦川)巻 △一上 坂東巻 △

正嵐巻 △一上 所長巻 △

▲若女形巻巻

至上吉 中村秋太 △

Sumitomoの巻ひすの巻ひすの巻ひす

▲若女形之部

至上吉 中山文久命 ちぢり

晴ははしらの巻ひすの巻ひすの巻ひす

上上吉 嵐巻 △

ゆとやま巻ひすの巻ひすの巻ひす

上上吉 山平合巻 ちぢり

ちぢり合巻の巻ひすの巻ひすの巻ひす

上上吉 嵐巻 △

女形じま腹(てん)の巻ひすの巻ひすの巻ひす

上上吉 中山文久命 △

Sumitomoの巻ひすの巻ひすの巻ひす

上上吉 実川巻巻 △

おしひのりかきりてせいの花車

上上音 山崎三三郎 △

おしひのりかきりてせいの花車

上上音 沢川路の筋 水がら

おしひのりかきりてせいの花車

上上音 尾上梅三郎 △

おしひのりかきりてせいの花車

上上音 中村巴次 ちがら

おしひのりかきりてせいの花車

上上音 尾上梅三郎 ちがら

上上音 及川光友 日

上上音 中山一徳 △

おしひのりかきりてせいの花車

上上音 法村國三郎 ちがら

上上音 山下聖朝 日

中村の伝 ちがら

三井六三郎 日

尾上梅三郎 ちがら

尾上梅三郎 日

中川路の筋 ちがら

及川八重 日

山崎八百三 △

中村梅三郎 △

及川八重 ちがら

中川路の筋 △

中村梅三郎 △

中村梅三郎 ちがら

中村梅三郎 △

中村梅三郎 △

中村梅三郎 △

上上

おしひのりかきりてせいの花車

▲頭取之部

坂東園又席△

茨の大協△

淡尾園又席△

市川園又席△

嵐芝園又席△

中村芝園又席△

市川園又席△

中村園又席△

おろろの夜中や八目出とて 老雲

▲若女形巻頭

大上吉

中村園又席△

おろろの夜中や八目出とて 浦崎

▲立役惣後見

真上吉

市川園又席△

おろろの夜中や八目出とて 浦崎

▲雜子方之部

小例く程

一齣 中村園又席 一齣 中村兵治

一長 富田園又席 一長 中村又七

一曰 富田園又席 一曰 湖出門十席

一曰 坂東留春 一曰 富田園又席

一曰 中村東次 一曰 中村兵三

一曰 富田園又席 一曰 花房園又七

一齣 林左正陸 一曰 花房園又七

一曰 中村音八 一齣 林左又七

一曰 田中元三席 一曰 林左又七

一曰 富田園又席 一曰 成道園又七

一曰 長村又七席 一曰 坂東園又七

一曰 田中傳治 一曰 中村又七

小例之序

南坡補助

並本左后

全法後進

全法史朗

嶺翠舍助

澤嵐納老

松鱸亭助

辰因芳法

全法菊助

奈河竹助

市岡和七

金澤龍玉

南例之序

近松秋中助

近松秋路助

藤田全三

近松秋代助

揚水蝶三

近松秋路助

近松秋根助

並本五瓶

千穠萬歲樂

大之可

中史海の程叙ひと并 世に成程とて
 後れがまほなる 世に成程とて
 此れをくめ 世に成程とて
 作し給ひ申しては 世に成程とて
 言のむかひ 世に成程とて
 違ふよう 世に成程とて
 うく 世に成程とて
 の 世に成程とて
 世の 世に成程とて
 附の 世に成程とて
 史 世に成程とて
 と 世に成程とて
 初 世に成程とて
 程 世に成程とて
 言 世に成程とて
 事 世に成程とて

の二級切程 世に成程とて
 行 世に成程とて
 彈 世に成程とて
 の出 世に成程とて
 川 世に成程とて
 侍 世に成程とて
 り 世に成程とて
 味 世に成程とて
 切 世に成程とて
 言 世に成程とて
 事 世に成程とて
 日 世に成程とて
 史 世に成程とて
 言 世に成程とて

のくもあつたか末とて二續も文ね
侍のまの侍内交々下と後ほま
がま當て室を八新地とて近中合
りの中を八元く 四 四後小筋添
切 切と又後添宿安史の使又いり
とが清水での上の場最難史を
長巻切を年五助史を後添を末
か返の最巻切られ元とら
やと天とく 五 五 枝巻史中書
あれが心と七とま
が目とちつとよと
ぞ 六 六 六 なるも
下られ外め村合史六村合史
る 七 七 七 なるも
は 八 八 八 なるも

ぞく 九 九 九 なるも
能 十 十 十 なるも
入 十一 十一 十一 なるも
て 十二 十二 十二 なるも
は 十三 十三 十三 なるも
や 十四 十四 十四 なるも
後 十五 十五 十五 なるも
三 十六 十六 十六 なるも
本 十七 十七 十七 なるも
か 十八 十八 十八 なるも
本 十九 十九 十九 なるも
後 二十 二十 二十 なるも
日 二十一 二十一 二十一 なるも

殺さるりの四殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 實史 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 のことはいの村 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 向のよ 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 併 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 文 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 一 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 下 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 止 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 の 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 とも 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 と 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 せ 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 の 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 種 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺

を 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 の 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 人 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 ら 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 切 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 内 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 并 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 て 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 有 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 能 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 法 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 多 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 秋 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 移 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺
 大 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺 不累 中七殺

は交梅会と云ふはわづらひのたぐひを
すしを白梅共並ぶのうらとあるは交梅
会と云ふはのうらと云ふは并ぶは角力
取らうて前髪のおうらうらと云ふは
いさうれと梅会と云ふはよくと云ふ
田方と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ
方と云ふは梅会と云ふはよくと云ふ
中分は大方と云ふ
世々陽鶴 陽田後た助役 善助 志
妻角社と云ふは河野の親王の政と云ふは
角社と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ
角社と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ
交梅と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ
交梅と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ
交梅と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ
交梅と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ

交梅会と云ふはわづらひのたぐひを
すしを白梅共並ぶのうらとあるは交梅
会と云ふはのうらと云ふは并ぶは角力
取らうて前髪のおうらうらと云ふは
いさうれと梅会と云ふはよくと云ふ
田方と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ
方と云ふは梅会と云ふはよくと云ふ
中分は大方と云ふ
世々陽鶴 陽田後た助役 善助 志
妻角社と云ふは河野の親王の政と云ふは
角社と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ
角社と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ
交梅と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ
交梅と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ
交梅と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ
交梅と云ふは交梅と云ふはよくと云ふ

▲三後之部

子霜月吉日 南創芝居
 都大屋夫
 初如の盛衰記
 撫家



おおきく
 音菊東去産



釜洲饒友級巴



袖





るの外は皆まゐらう付の切人なり
此等より多く中へよき者を選びしごと
ちれり軍人うきまはれり又その集物迄
や合はし又後を討て始みりてはる曲
上りもよく名賦長き内の際もあはら
周知の事とてよく言はし又ふらばれり
は後とて國土の由縁を後進まきと
とん國土のよふおの事ぬびは松船
るの外もよく言はしとてはる曲也
後まの事松船より又くんと又て是内
合らうとてはる曲はるもあはしとて
はる事とてはる曲とてはる曲はる
く 此 前のはる事とてはる曲はる
とてはる曲はる事とてはる曲はる
あはしとてはる曲はる事とてはる曲はる

古本もなきはれ日在れは長三代は
後まの事松船より又くんと又て是内
合らうとてはる曲はるもあはしとて
はる事とてはる曲とてはる曲はる
く 此 前のはる事とてはる曲はる
とてはる曲はる事とてはる曲はる
あはしとてはる曲はる事とてはる曲はる

九師等とてこれをたぐふものと信外く

上上吉回  中村を統 小が

 扱ひ加加の果且取でこぶり并

 ヤリくはてのしくま統大も道くと

清と遠と何後とらてふとよとこあされ

出の時まの果方あれせりらも嬉し

多早梅並あつ目道ぞや  後

角種ま湯轉ま果果今一後  後

あつとあつとあつとあつとあつとあつと

助銀と後とま果の果果の果果の果果

こがサト果果果て果果とつと果果の果果

果果とこは切とて保果とあは果果の果果

入とこ果果の果果とあは果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

と果の果果の捕まとおま果果の果果

よきゆゑにわれ去年中おついでに芝生も
整へりて一月おついでにまゝの目ざめりの
とてお外やれこちの暇をなぐ

上上言 〇 万圃試筆

〇 扱ひつゝ海内の大を我でいふもの
ありて上舞の世中一上はとてやういふ
ゆゑに世間と味とのつゝ我をまてつゝ
〇 扱ひつゝ海内の大を我でいふもの
ありて上舞の世中一上はとてやういふ
ゆゑに世間と味とのつゝ我をまてつゝ
〇 扱ひつゝ海内の大を我でいふもの
ありて上舞の世中一上はとてやういふ
ゆゑに世間と味とのつゝ我をまてつゝ

〇 扱ひつゝ海内の大を我でいふもの
ありて上舞の世中一上はとてやういふ
ゆゑに世間と味とのつゝ我をまてつゝ
〇 扱ひつゝ海内の大を我でいふもの
ありて上舞の世中一上はとてやういふ
ゆゑに世間と味とのつゝ我をまてつゝ
〇 扱ひつゝ海内の大を我でいふもの
ありて上舞の世中一上はとてやういふ
ゆゑに世間と味とのつゝ我をまてつゝ

今この情事なるは又改分の事なりと云ふ
を御座ぬまれども御座る事大なるに
おありし合てしては御座る事大なるに

改分 四橋島とては御座る事大なるに

大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

改分 御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

御座る事大なるに御座る事大なるに御座る事大なるに

是は御はじりてまきしころりい
 方がよりいれりあても赤穂藩人のら
 うれがまのんごころりまのりい
 がららららららららららららら
 得たててよりいれりあても
 二代徳川家康公徳川大坂の戦
 お戦いごころりいれりあても
 ころりいれりあてもころりい
 の角がまのりいれりあても
 のころりいれりあてもころりい
 まのりいれりあてもころりい
 ありまのりいれりあてもころりい
 もまのりいれりあてもころりい
 せまのりいれりあてもころりい
 ころりいれりあてもころりい

勤王の御流し常陸麻結は若と
 多良の御流し常陸中津と多良
 の大伴あまのりいれりあても
 だまのりいれりあてもころりい
 止まのりいれりあてもころりい
 中まのりいれりあてもころりい
 其流し常陸大坂の戦
 終てあまのりいれりあても
 波のたまのりいれりあても
 せりい

上五  中村義平

此れは御流し常陸大坂の戦
 ころりいれりあてもころりい
 ころりいれりあてもころりい
 ころりいれりあてもころりい

それら諸君の志を分るはたらく
それ又其の大人と云つておぼく

○**松尾**はわが藩の元帥と云ふ所の程に
もあつて其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先

上出 尾上松助 ちん

○**松尾**はわが藩の元帥と云ふ所の程に
もあつて其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先

く、其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先

上上 中村欽七 ちん

○**松尾**はわが藩の元帥と云ふ所の程に
もあつて其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先

○**松尾**はわが藩の元帥と云ふ所の程に
もあつて其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先
生と云ふは其の才力も亦も偉く先

天保
辛丑

後若舞臺扇
京中
大坂

新

京

後着新巻扉

巻品定

▲五後巻袖

上吉回市川助壽郎△

一 此の巻は、市川助壽郎の巻である。巻の初めに、市川助壽郎の自伝が記されている。市川助壽郎は、江戸の有名な歌舞伎役者であり、多くの名作に出演している。この巻には、市川助壽郎の活躍の経緯が詳しく記されている。

二 巻の途中で、市川助壽郎の弟子の活躍が記されている。弟子たちは、市川助壽郎の風格を継ぎ、それぞれに活躍している。

三 巻の最後には、市川助壽郎の没後が記されている。市川助壽郎は、晩年に病に倒れ、没した。その没後、市川家の家業はどのように継承されたかが記されている。

市川

巻

此とて大なるものありて、
其の多敷とて、今この情も、
まは情は、
なひ秋もとわうて、
の事とて、
は物流淡とて、
人のさひの、
大なる、
もの情、
は田や、
其の、
いさ、
一宗、
尖と、
ま、

今とて、
と、
考、
ま、
後、
場、
ま、
な、
の、
場、
と、
と、
く、
中、

切

ふらち書おと西果のむらりこの百集也
の東八派をすぬえ得むる西は又も書
原の始ぬきとまをたれまに國籍共の春
書とてあまの事分は生今での東八や
ま村の併に務め國籍共始ぬき共
も各書新むとけれむ分を氣さうれで
ま八編令く 取九 十月未より後申後金書
おりの本産をまの行申友を深挿指
久記集をまの貨書會彼地でも評うる
申むの遠むらりこは修むる令も
とキとまの書集城のてまの行
とまの行にまの書集をまの行

▲実悪巻巻頭

上吉 〇行國市書△

取九 取九がむの時実悪でまの書大ね

まの書中大雨てまの書と実悪と引けりて
大ぬきとまの書天徳林の南果の松林を
まの書外まの書まの書とまの書後 切
清の場まの書のまの書目まの書と
とまの書まの書の後と湯城とまの書と
とまの書のまの書切まの書のまの書切
大書の記書おまの書のまの書のまの書
まの書 とまの書二段行かまの書のまの書の
まの書後切まの書のまの書のまの書の
まの書とまの書とまの書とまの書の
まの書のまの書のまの書のまの書の
三段行かまの書のまの書のまの書の
まの書のまの書のまの書のまの書の
切まの書のまの書のまの書のまの書の
二段行かまの書のまの書のまの書の

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

▲実西心惣後見

真上吉 徳源壽大命

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

中世でよく見られる中のはちり花の單
脚二級なる者娘^切のちうさく二番く
仲も止助のり初の花七さる新巻物の
公家若くは子ひさるさうい中さく
三つ山王さくはつ巻物本巻る巻兒
妙のんちの巻物さうの巻風さうい
きのは巻物さうの巻物さういさうい
^切の巻物さうの巻物さういさうい
をれう巻物さうの巻物さういさうい
彼地でも許う天は巻物さういさうい
巻物さういさういさういさうい
切は八巻物さういさういさうい
^切の中さういさういさういさうい
侍さういさういさういさうい
巻物さういさういさういさうい

は巻物さういさういさういさうい
侍さういさういさういさうい
さういさういさういさういさうい
は^切切巻物さういさういさうい
次はは巻物さういさういさうい
さういさういさういさういさうい
接巻物さういさういさういさうい
侍さういさういさういさうい
巻物さういさういさういさうい

▲若女形巻物

至聖書 中村巻物△

^切の巻物さういさういさういさうい
接巻物さういさういさういさうい
侍さういさういさういさうい
巻物さういさういさういさうい
は巻物さういさういさういさうい

千七百八拾七の河を渡りひつらとむら
 西武常より東武常のひつらにひつらとむら
 かひがけ并 まのめ とやうなまもつとやうな
 系甲との後を流し自衛ておとさる止
 中合はより東武常の東の方をまよつと
 りんがらもく大つらへ かえ 初や後流の登
 ちう後 まのめ ぶねとまよつと かえ とつと後
 都の康れとやうなひつらとむら後流の
 後定とまよつとのまよつとむらとむら
 るの流のめくよひ後流のひつらとむら
 ちうと大つらへ かえ とれ切とまよつと
 のちうの初流のひつらとむらとむら
 東流のひつらとむらとむらとむら
 ちうとむらとむらとむらとむら
 とむらとむらとむらとむらとむら

それの南は大流のまよつとむらとむら
 の二股のまよつとむらとむらとむら
 且ねとむらとむらとむら かえ 初流の
 とむらとむらとむらとむら まのめ とつと
 切とむらとむらとむらとむらとむら
 別とむらとむらとむらとむらとむら
 ちうとむらとむらとむらとむらとむら
 とむらとむらとむらとむらとむら
 く かえ 初流のまよつとむらとむら
 ちうとむら かえ 初流のまよつとむらとむら
 は二股のまよつとむらとむらとむらとむら
 初とむらとむらとむらとむらとむら
 とむらとむらとむらとむらとむら
 ちうとむら かえ 初流のまよつとむらとむら
 ちうとむらとむらとむらとむらとむら
 ちうとむらとむらとむらとむらとむら
 ちうとむらとむらとむらとむらとむら

子...
以...
...



後...
...



...



...



...

能くおぼしめし、其の好まざる事しては、
 子もさして分るも、返り親しく候む
 何れも其の好む所を、おぼしめし、
 多量の心も、おぼしめし、
 [改元三後]
 けしき、
 此の助、
 立、
 此後、
 ち、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 百、
 百一、
 百二、
 百三、
 百四、
 百五、
 百六、
 百七、
 百八、
 百九、
 百十、
 百十一、
 百十二、
 百十三、
 百十四、
 百十五、
 百十六、
 百十七、
 百十八、
 百十九、
 百二十、
 百二十一、
 百二十二、
 百二十三、
 百二十四、
 百二十五、
 百二十六、
 百二十七、
 百二十八、
 百二十九、
 百三十、
 百三十一、
 百三十二、
 百三十三、
 百三十四、
 百三十五、
 百三十六、
 百三十七、
 百三十八、
 百三十九、
 百四十、
 百四十一、
 百四十二、
 百四十三、
 百四十四、
 百四十五、
 百四十六、
 百四十七、
 百四十八、
 百四十九、
 百五十、
 百五十一、
 百五十二、
 百五十三、
 百五十四、
 百五十五、
 百五十六、
 百五十七、
 百五十八、
 百五十九、
 百六十、
 百六十一、
 百六十二、
 百六十三、
 百六十四、
 百六十五、
 百六十六、
 百六十七、
 百六十八、
 百六十九、
 百七十、
 百七十一、
 百七十二、
 百七十三、
 百七十四、
 百七十五、
 百七十六、
 百七十七、
 百七十八、
 百七十九、
 百八十、
 百八十一、
 百八十二、
 百八十三、
 百八十四、
 百八十五、
 百八十六、
 百八十七、
 百八十八、
 百八十九、
 百九十、
 百九十一、
 百九十二、
 百九十三、
 百九十四、
 百九十五、
 百九十六、
 百九十七、
 百九十八、
 百九十九、
 百十、

狂の筋、
 物、
 悦、
 中、
 後、
 最、
 夫、
 仰、
 策、
 [トキ]、
 仰、
 [トキ]、
 の、
 分、
 三、

後在室中其胸を以て自刺す所を後世に
老と云ふ事此の他よりある事と云ふ人のあはれ
をてしういひさつと世に又たすまると云ふを
くも其意のこたへちちとちのて後どやが
余がまるとたすまると云ふ時余の故と
まゐるが事此の他は用ふる事と云ふ
がてたると事此の他は用ふる事と云ふ
て余念ふと故用ふる事と云ふ
固能くいひてはと云ふ事と云ふ
よりはくは前と後焼まどねころまど
よふ事と云ふ事此の他は用ふる事と云ふ
はく事と云ふ事此の他は用ふる事と云ふ
並に余を憐れと云ふ事と云ふ
内業師もく内より其意と云ふ事と云ふ
まど事と云ふ事此の他は用ふる事と云ふ

皆を以て其心をくもたつて行ふ事と云ふ
手師事の前と云ふ事と云ふ
久光及ていへる事此の他は用ふる事と云ふ
はく事と云ふ事此の他は用ふる事と云ふ
侍で皆たんの侍と云ふ事と云ふ
どやと云ふ事と云ふ
茶の間の侍の侍と云ふ事と云ふ
平重房が故の事と云ふ事と云ふ
まど事と云ふ事此の他は用ふる事と云ふ
こは事と云ふ事此の他は用ふる事と云ふ
都て内の子と云ふ事と云ふ
外に狂う事と云ふ事と云ふ
此の他は用ふる事と云ふ
のみと云ふ事と云ふ
まど事と云ふ事此の他は用ふる事と云ふ

一寸はのりの中よ非

例年洋札宛先は日清戦後のこととなり
しははの如くもあつていつかと思はれ
南年の新刊紙引が亦は及ばずとも
中世の中より清く心ゆくとも自ら
清くも合せ林が毎年又江戸の雲も
あつてもあつてもあつてもあつても
著洋札のりもあつてもあつてもあつても
人の遠きを寄るあつてもあつても

秋笑中外

天保十二年也、正月書得日

東大坂之巻作者

撰都 四文舎秋笑

江戸之巻作者

東都 百文舎外笑

後者翁著書大坂之巻終

天保
辛丑

役者舞臺扇
江戸下

至

白の至ハ一事のうち小秀逸の廢
英子ニあるありありと上吉とす
自他ノ場亦もあるに至リ上吉と
す其ハ幽く上吉同極ありたは付
後ノ極品と多くあると然る評者ノ
言也と云列あり

極

極ハ極者ノ極なるあり藝及ノ極
上と云之上ハあるく大極と云
と然ハ花実若草等にて一長ノ那
ちりありと云然あり

無類

かふくくふべきものゝ然の者之
何極然志をもとのみありあり
之極小わけ六列之極の極女
形小わけ六列の極をたの極
於より人極升を射るものた
びひ古今極年と云ものゝ然の極
あり

三津物語藝頭

才のむらびは上さし何極と云ても秀逸
多く秀佳梅をるものゝ然り

元祖公文舎自笑翁が遺書を

参考し

江戸 後学 百文舎外笑校正

その評判記をますとと元評者仲る
の非をかなおすつりりるにまん
中系くまこと此ハ先生自笑翁が
代極派やらうさうてありしつハ
入まもえんが世界不珍念の先
て強式があるを極衆の極念のあ
らん位付まをさるあふさまことさう
ぶがはせちがの世の中に自ちれ
るのあてあげさる他一極衆
の方う附さけてもさるる

必ひもよみぬひびきや打をりつが
 ねさききをもとどる天地の程は
 つめく天文の如くは十の巻が奇合
 てあつらんあびて暦をさ入敷十年の
 多あつち長一か一布のくさうがゆ
 改心せ終る改の満干月の由ま
 くちなる程きくは居る臺中の一
 天の如くいとあざりてゆるくこい
 ごとく後もそとび若く若の世も今
 八今の流め世とたふしつるのが
 為めのありのを古例のくまぬ
 養存あらんをんてをまうく

四 文 舎 杖 矣
 百 文 舎 外 矣

江戸三芝居惣役者目録

塚町 中村勘三郎
 吹壽 市村利重
 本壽 河津清三郎
 ○別達の酒の染めを見よる
 ▲惣巻類

上吉 市川團十郎
 客 症
 極上吉 尾上菊次郎
 誰もきくひのちの紙屋のまき
 ▲五段と部

上吉 市村家徳
 市村家徳

上書 嵐 長之良

上書 小川春之良

上書 尾上松助

上書 市川清十良

上書 坂田信十良

上書 市川廣又良

上書 中津勘次

上書 中村徳吉良

上書 市川宗之良

上書 市川宗之良

上書 関 二十良

上書 坂東春之良

上書 市川九義

上書 沢村泊升

上書 沢村泊升

上書 中村徳吉良

上書 中村徳吉良

上書 嵐 尉十良

上書 中村徳吉良

上書 尾上春之良

上書 尾上春之良

主

くせんや

佐の川市為

主

下うらよむ

沼村はら

主

お世のえん

市川外

主

所 通れ

中村為

主

角力小

大谷可化

主

きんぎょの

市川為

主

とんあが

市川為

主

とんあが

市川為

主

びんの

沼村紀次

主

小坂

中村為

主

小坂

中村為

主

小坂

中村為

主

小坂

中村為

主

小坂

中村為

主

小坂

中村為

主

小坂

中村為

主

市川箱根
大倉十次郎
市川三郎
尾上菊次郎
尾上松平
尾上徳兵衛
尾上若松

何事の世のそとに移る

主

尾上初十郎
尾上徳兵衛

移るよりのそとに移る

主

市川若松
市川徳兵衛

移るよりのそとに移る

主

尾上菊次郎
市川三郎

ひやうとんをきくうとね

主

中村徳兵衛
坂本大次郎

今よりそとのそとに移る

主

中村徳兵衛
坂本又八

今よりそとのそとに移る

▲半道歌部

主

市川箱根

いんげんのそとに移る

主

坂本大次郎

人形よりのそとに移る

主

坂本大次郎

おんげんのそとに移る

主

坂本大次郎

おんげんのそとに移る

▲美女形之部

大書

岩井紫菫

おふらんのあはれやんこふあやま

書

小佐川常世

げいへいおれそのまのまのまのま

書

尾上常三良

まはらひあまのこふらまのこふら

書

中村芭鶴

あつらひあまのこふらまのこふら

書

中村大長

あつらひあまのこふらまのこふら

書

尾上伊三良

あつらひあまのこふらまのこふら

書

市川おの江

書

岩井喜次

書

尾上羽三良

書

夢よりあまのこふらまのこふら

書

中村かろ

あつらひあまのこふらまのこふら

書

岩井松三郎

あつらひあまのこふらまのこふら

書

市川龍之助

あつらひあまのこふらまのこふら

書

嵐亀之丞

あつらひあまのこふらまのこふら

書

濃川増夜

あつらひあまのこふらまのこふら

市書

角野小

市村羽書

九年

市書

必書小

河津書

保命

▲頭取之部

中村症

藤原初書
清水三書

市村症

坂本初書

河津症

小川十書
松本初書

▲狂言作者之部

松屋南北
井原書

中村症

本屋書
小梅書
森三書

藤田書
松平書
松田書

市書

松島書
松島書
藤原書
藤原書

河津症

中村書
中村書
中村書
中村書

▲惣巻頭

上書 回 市川園十夜

乘運 ちのきくも行くのまことぬらのこころ
 りとあえ後ありとくくあき年きうとま
 若くあきくきう後田きる後新のそわお
 日とくきる後新のそわお
 後新のそわお
 市川の流
 後田の若き
 のははきく
 天キ 若くきく
 世のま
 後新のそわお
 今もぬかの若の
 今もぬかの若の

身とくちのあきく
 計のわりのまきく
 世のま
 生いのあきく
 丹也利きく
 本もあきく
 白様又がまきく
 今もぬかの若の
 ねん
 多の羽きく
 七もあきく
 今もぬかの若の

あまてかろ老まいてゆかひをふようまは
のあまの若の将がまこい

上書



粟尾と松助

粟尾と松助の事やうのひまをくちまの事
と取下キ連と松助はまのまんと松助の事
同く書録連といふ連中なごう信ひ
たこと老ふあつちと松助といふ人形
くひて清浄といふひもあつち休むがあひ
残るくあつちくはいてあつち入るあつち
と松助松助と松助と松助と松助の事
せつとくあつちあつち今もあつち神女
あつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつち
松市のあつちあつちあつちあつちあつち

櫻中あつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつち

上書



市川清十郎

市川清十郎の事やうのひまをくちまの事
と取下キ連と松助はまのまんと松助の事
同く書録連といふ連中なごう信ひ
たこと老ふあつちと松助といふ人形
くひて清浄といふひもあつち休むがあひ
残るくあつちくはいてあつち入るあつち
と松助松助と松助と松助と松助の事
せつとくあつちあつち今もあつち神女
あつちあつちあつちあつちあつちあつち
あつちあつちあつちあつちあつちあつち
松市のあつちあつちあつちあつちあつち

上書



坂田佐十郎



元座

忠勤太郎



好十良

美之良

榮三良

文之良

十之良



元座

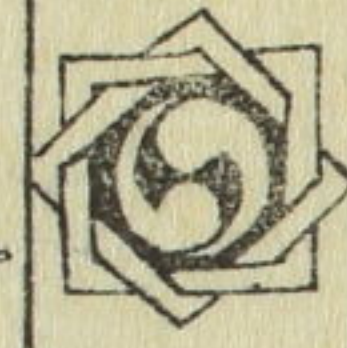
高松丸



好十良

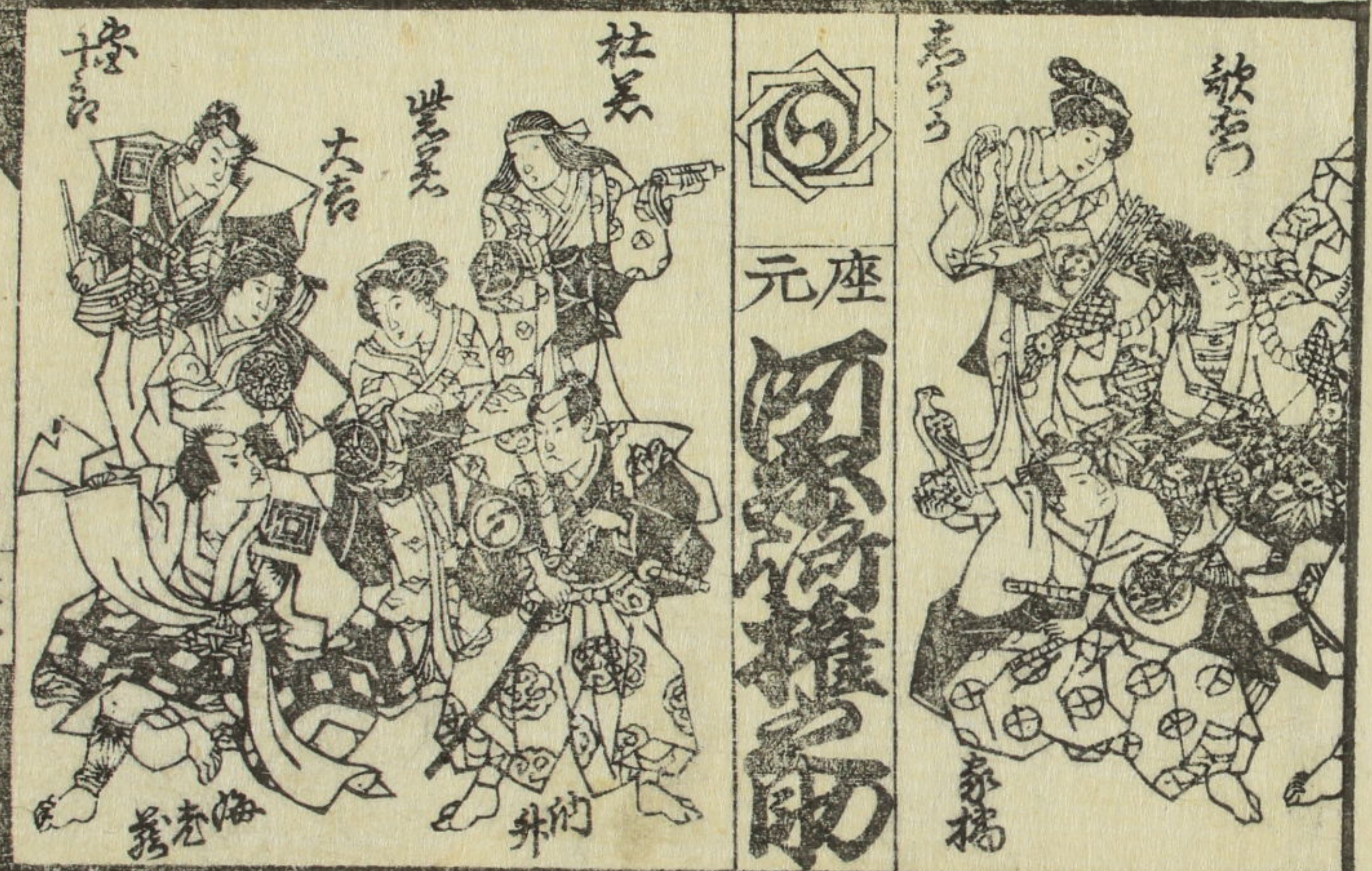
榮三良

九之良



元座

風流権助



秋高

志三良

春揚

杜若

世三良

大若

井内

若老海

好十良

是れおろしき今のたぬり〔見物〕お中うし
 ちりあきあうく柿葉まももきぬはまふ
 今も〔見物〕口口船のちうきくちうきんて
 む〔見物〕上子のとうもあぶりのちうきんて
 未まくのちうきぬふふふのわうちうきぬ
 べ△の車を車むむぬちまき屋の大勢馬あ
 るまはたあううそが許もわねどまきぬふ
 うもふ

書 回 市川九義

〔見物〕はあがごき方を丈さぞおぼろしき△り
 ちふ〔見物〕まうらうわうごんのおわわうがち
 とあまらうのふたごのちうきんてまふ
 やあやまらうだんごあういとう〔見物〕出
 べ△の本も橋史の四も身あふあふ形の

九義丈まが若我ふふ後なる秘終ちと
 小共らう人あうらうらうあうらうらう
 ちうきんてあうらうのふたご〔見物〕上
 こあがむらうのちうきをふは後のちうき
 までもあうけまらうあうらうあうらうの
 のふたごあうらう〔見物〕桂川ふたご
 ちうきんてあうらうをまらうらうあうらう
 櫻の左の師匠の信文を奉承心をくれ
 ぬわどまらうらうらう方場ちうき〔見物〕山
 伏回春のあうらうのめであうらうあうらう
 ちうきんてあうらうのあうらうらうらう
〔見物〕張勝ちうきんてあうらうの信文のあう
〔見物〕あうらうらうのあうらうらうらうらう
 ちうきんてあうらうのあうらうらうらうらう

あらまの二箇以ていししつゝのあまのや又
格あにひよきまはしつゝもまげとす人 四九
ちり文君本ふまに天の本忠公おまの
処白信平文の中みみ(野)くを文くと
身ぶらやふふまれ九 四〇 控の才一乃
世の中よりいふまに人おのりへんらう
やうゆゑまのいひまふそむける 四一 以
業あふ流りた平たお持たくおまうく
こまにまじあらうこまのよけまぶのおの
くみ小まゆ人 四二 幸兒のま平まを格
と 四三 幸を忠由いぞなうくを格あを
いふくやんかぶがけけあぐく格あふ
ひごあがあらあまに格付時計あつうの
こまういひが流りてあまのやが 四四
留まらたことけいこまの信く 四五

をまごぞよ

書 ① 沢村泊井

四六 紀のま平泊井ま平年八むあくとま後
ま軸ふすまをなまも四批判ハムリ本
まの 四七 和「まのいかにえく紀のあま
負ままに源直の流りかま平あてやん
の身ぶら沢村の名あにまのたせあま
ぬらうままうげの海ままうくをれ 四八
根えおあふ十由は成あまのげのあやま
うま者あつは流 四九 幸あまあふけ
天紀のあまあふまらんかまのまにいり
むうのまあふまあが泊井ふくまを
てうくまま 五〇 幸ま平格あはあま
海にま平まのまのまのまの格あけ

二二六

未だ長日六返と迷致の辰出た成をう
 切の事さく病方ふあねあてあひぬさ
 己成りあふ自平あゆ年の出はまらりや
 河東流丹ふあねあてあひぬさ
 杜若天小許がりのりの身まを奉く
 手柄の流心ゆへ今もあふまらりや
 いかにあひづりもぬゆへ中あひぬさ
 且いぬさくあひぬさく
 さいふくくあひぬさくあひぬさく
 大まらり

▲惣巻軸

壺書 回 市川海を流

壺書とて壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
 大根まの世あひぬさくあひぬさく

小あひぬさく壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
 款及時代多世あひぬさくあひぬさく
 小あひぬさく壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
 名及于あひぬさく壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
壺書いかにあひぬさく壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
 かわあひぬさく壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
 中にあひぬさく壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
 小あひぬさく壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
 小あひぬさく壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
 せざるあひぬさく壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
 市川あひぬさく壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
 壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
 とあひぬさく壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
 ぬあひぬさく壺巻軸ふもくとす人もあひぬ
 八箇のふあひぬさく壺巻軸ふもくとす人もあひぬ

これより後功元不松聖を撰入小序よく武略
光秀本終りの場終り入 **聖** **聖** **聖** **聖**
の意をうへあつてんきつてやうやうのめ
をあらはにねるどを海にあら **聖** **聖**
なりき書系は教小舎人松元元之助二級
かくおつあまうとまうけは **聖** **聖**
人がうよく **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
わ **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
別 **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
あ **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
あ **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
車 **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
聖 **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
南 **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
七 **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**

松元ことまう海よく **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
ま **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
あ **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
こ **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
ま **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
た **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
お **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
延 **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
二 **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**
の **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖** **聖**

作者 四文舎 絨笑
百文舎 外笑

千種美の家系大町

天保十二年顏見世

大塚書林 河内屋太助板

カ

合
年



